

# お薬の話…10

## 妊娠と薬

妊娠中に薬を服用することに不安や疑問をお持ちではないでしょうか。そこで、今回は「妊娠と薬」について、少しお話をしたいと思います。

皆さんは、昭和30年代に起きた「サリドマイド事件」をご存知でしょうか？

主に睡眠薬として使用されたサリドマイドを妊娠初期に服用した妊婦さんから、四肢の全部あるいは一部が短いなどの奇形をもつ新生児が多数生まれました。この事件は薬害を考える上で、原点ともなった出来事です。（※現在、サリドマイドは多発性骨髄腫における有用な治療薬として徹底した管理のもとで使用されています。）

妊娠期間中に服用した薬が胎児に影響を及ぼすかどうかは、薬自体の危険度と、その薬を服用した時期が重要になってきます。

危険度についてですが、奇形を生じる可能性が高いと考えられる薬があります。たとえば、抗てんかん薬（トリメタジオン・フェニトイン・フェノバルビタール・バルプロ酸・カルバマゼピン等）、抗凝固剤（ワルファリン）、ビタミンA、高脂血症薬（プラバスタチン・シンバスタチン等）などがあります。また、妊娠後期に服用すると

危険な薬には、高血圧薬（エナラプリル等）、抗生物質（テトラサイクリン系）、などがあります。（患者様によっては治療上、服用が必要な薬もあります。）

次に服用時期ですが、最も影響を受けやすい時期は胎児の心臓・消化器・四肢などの臓器が作られる妊娠4～7週目末までの時期です。その後の影響は、出産日まで段階的に減少していきます。しかし、薬によっては、妊娠後期に影響を受けやすいものもあります。

妊娠または妊娠の可能性がある場合には、やはり安易に薬を服用することは慎むべきですが、気付かず危険度の高い薬に影響を受けやすい時期に服用したとしても、必ずしも奇形児が産まれるわけではありません。あまり神経質になり過ぎないようにしましょう。市販薬を服用する場合や受診の際には、必ずその旨を伝え、医師又は薬剤師に相談してください。

〈薬局〉

